

ブレーマーハーフェン 志賀トニオ氏



ミュージカルの場面

今シーズンは演劇部門の演目であったミュージカル"スパマロット"の指揮を担当しましたが、そのプレミアが終わった後は並行して稽古が進行していたヘンゼルとグレーテルのオーケ

ストラとの舞台稽古に参加しました。今回は娘4人が合唱団として参加していたので、せめて最後の10日間稽古に関わる事ができて嬉しかったです。

ヘンゼルとグレーテルの子供が歌う箇所は、魔女によってお菓子にされてしまった子供達が、魔女が退治された事によって人間に蘇る場面で、曲の最後を締めくくる大事な役目です。歌うのも難しく、彼女達にとっても大きなチャレンジでした。そして、本来はこの場面しか子供の出番はないのですが、今回は演出家の意向で曲の始まりと第2幕にも出演する事になり、拘束時間が長く大変でした。夜の公演では19時に会場入りし、帰宅するのが22時を過ぎてしまうので、小学生にはなかなかハードです。

子供の参加するオペラでは休憩前に出番が終わってくると助かるのですが、なぜか多くの作曲家が作品の終盤に子供を登場させるのが不思議です。以前も蝶々夫人に当時5歳だった娘が参加し、22時過ぎに最後の場面に登場する直前に目を覚ます為にひとかけらのチョコレートを食べさせていたのを思い出します。



ヘンゼルとグレーテルの場面 筆者の4人の娘さんが出演

さて、ヘンゼルとグレーテルのプレミアが無事終わった後はドボルザーク作曲のルサルカです。彼のオペラの中では、ドイツで最も人気があり、とてもロマンチック且つ難易度の高い作品です。

歌うのも大変ですが、ヴォーカルスコアが弾き難く大変苦労しました。コレペティトアの友人達と話をして分かったのですが、多くの同僚がこのヴォーカルスコアにてこずっているようで、自分だけではないと少し安心しました。

そこで今回はヴォーカルスコアの良し悪しについて少し解説したいと思います。

今回のルサルカはBärenreiter (ベーレンライター版) Solc (ソルク) 編。この版ではスコアにあるオーケストラの音をヴォーカルスコアに詰め込みすぎていて、そのまま弾く事が不可能である箇所が頻繁にある為、必然的に弾く音を選別する事を余儀なくされてしまうのです。弾く音を選別する事自体は我々コレペティトアにとっては日常茶飯事なのですが、その頻度が多すぎると弾きにくいヴォーカルスコアとなるのです。業界でよく話題になるのがモーツァルトのヴォーカルスコアの比較です。20数年前まで多く使われていたのがPeters (ペータース) という出版社で、とても弾きやすいヴォーカルスコアです。初見でも弾けるように音が配置され、コレペティトアが譜めくりに音を省く事まで考慮して楽譜を作っていると感じます。

それに対し20数年前から世に出始めたBärenreiterのヴォーカルスコアは、前述のルサルカと同様にスコアにあるオーケストラの音を忠実に再現する事に重きを置いた結果、学術書のような楽譜となってしまい、所謂弾き難いヴォーカルスコアになってしまったように感じます。昨今Bärenreiterは自筆譜に最も忠実な版として高い評価を受けています。私もモーツァルトのスコアは必ずBärenreiterを使用しています。しかしシューベルトのときにはBärenreiterを使用しません。なぜなら、シューベルトの時に問題になる自筆譜からは見分け出来ないアクセントとディミヌエンド">"をアクセントで統一してしまっている為に、作曲者の意図と異なる結果をもたらす可能性が高まるからです。Bärenreiterは全て素晴らしいと思わず、適材適所で出版社を選んでもらえればと願っています。